

俳人・宇多喜代子さんの

534

宝塚歌劇

たしなみの文化考

現代を代表する俳人の一人、宇多喜代子(せん)82は、大の宝塚歌劇ファン。17歳の時に大阪に移り住んで以来、65年間にわたって公演を見つけている。台風が号が接近した先月下旬の午後、阪急・宝塚駅(兵庫県宝塚市)で落ち合った。ショッピン街を抜け宝塚大劇場へ通じる道標「花のみち」を歩く。道すがら、「私の高校時代、この辺りはまだひなびた温泉街の風情があったね。何百回この

大劇場のとりこ 65年

道を行き来たことか……。当時、父の転勤で大阪へ。街に不慣れた女学生に対し父は「これから乗る電車はコレ、外食はココの7階」と梅田駅をはじめ阪急電車や阪急百貨店を案内してくれた。そんなある日「百貨店3階、後手に組んだ小柄な老人とすれ違ったの。父がそとで『小林三三三』と教えてくれた。以降、通学の電車内で何度もお見受けした。宝塚歌劇を見たいと高校生の小遣いでも何とかなったし親も安心して送り出した。そう言っって往事をしのぶ。

絶えぬ「新陳代謝」の力

※宝塚歌劇創立100周年を記念し2014年4月に大劇場内に開館した。2階が「殿堂ゾーン」=宝塚歌劇の年表▽創立者・小林一三の業績▽殿堂入りした卒業生、スタッフらの紹介。3階が「企画ゾーン」=最近の公演の衣装や小道具を展示▽舞台の大セットを背景にした記念撮影コーナー——など。現在は企画展『『モン・パリの90年』より90年〜レビューの今と昔』を開催中(12月15日まで)。入館料500円。劇場休演日は休館。宝塚歌劇インフォメーション(0570-00-5100)。

いつだって晴れやかな心に



「宝塚歌劇の殿堂」で往年のスターについて語る宇多喜代子さん。句材を思いつづたびにメモ帳に記す。いずれも兵庫県宝塚市で、菅沼美穂撮影

言葉の淵源を追究

新句集へ向け格闘中

宇多さんは18歳で俳句の道へ。結社『獅林』の遠山麦浪の手ほどきによった。その後、桂信子が主宰した句誌『草苑』の創刊(1970年)に参加、師事した。

<リラを憶えば睡くてならぬ波の上>(第1句集『りらの木』)、<鉄片やかならず男がたちどまる>(第2句集『夏の日』)、<八月の窓の辺にまた象が来る>(第5句集『象』)、<円心の芒一本明日はありや>(第7句集『円心』)。

初期の固定観念にとらわれない現代詩的な世界から、実存的で言葉の淵源まで降りた懐深い句風が特徴だ。今年創立70周年を迎えた「現代俳句協会」の会長だった時、『昭和俳句作品年表 戦前・戦中篇』、『同・戦後篇(昭和21~45年)』の編集に携わった。結社や句集単位でなく句の発表年ごとに編まれた作品年表で「昭和俳句」を見渡せる画期的な内容だ。「会員と力を合わせ俳句の通史を世に問えたことは組織のいい面を生かした。一人ではなし得なかった」

来年、新句集を刊行するため、「机のうえて呻吟しながら言葉と格闘している。ももんとした時は宝塚歌劇で心のあか落としをすればいい」。気骨と品位あふれる表情でそう語るのだ。



うたきよこは1935年山口県徳山市(現・周南市)生まれ。武庫川学院女子大学(現武庫川女子大)卒。2001年、句集『象』を出版。昨年、日本芸術院会員。他の著書に『宇多喜代子俳句集』(角川芸文出版)、『エッセー集俳句と歩』(KADOKAWA)など。

見の場所。宇多さんはうわあ、懐かしいとパネルに見入った。

古くは、雲井浪子(在団期間1913~19年)、越路吹雪(同39~51年)から大浦みずき(同74~91年)らまで往年のスターが並ぶ。「南の哀愁」(初演は47年)などを演出した内海重典の写真パネルの前では、「せりふが輝き出るくらい見た」。喜多弘、羽山紀代美ら振付師のパネルの前では「タキシードの似合う日本の男優さんってないわね」。この人たちがそれを引き受けてきた」とテクリ、ひいきにしているスターは、そう差し向けると、「格別に好きな組やスターはいない」と意外な答え。「強いて言うのなら、春日野八千代(同29~2012年)や扇蘭(同1964~79年)の放つオーラは圧倒的でした。『無常の舞』の『麗美人』、『国性爺合戦』の『アール・ネット』などの大作に圧倒され、レビューを見ては明るい気持にならぬ。照り降りに関わりず呼吸をするように見てきたのが長続きの要因かもしれない」。

折々に輝きを放つスターが出ては去って。深い新陳代謝こそが宝塚歌劇をマンネリにせずファンを引きつける秘密かもしれないと語った。【有本忠信】

次回11月5日掲載